

いつもの店が無くなった時

巫夏希

1

「冠天堂が潰れただと……?」

私はその言葉を聞いて先ず抱いた感想は、そんなことなどありえないというものだった。なぜなら、冠天堂は老舗の和菓子屋だ。最近はずるずるふわロールケーキなど和洋折衷の食べ物を多くリリースしており、私も週に一度はわざわざ江の島の本店まで食べに行くくらいだったのだが、最近の仕事が立て込んでいてなかなかいくことができなかった。

「違いますよ、夏乃さん。過去形じゃなくて、未来形です。つまり、今月末には閉店してしまうんですよ、冠天堂は」

そんなことは関係ない。

今月末に閉店しようが、いま閉店していいように、そんなことは関係ない。

問題は、冠天堂が閉店してしまうということ。ただそれだけだ。その事実を考えるだけで、仕事に手がつかなくなる。

「……先週もゆるふわロールケーキとロールケーキパフェを食べに行つたじゃないですか。それで我慢してくださいよ」

「我慢もクソもあるか！ 少年、二度と食べに行くことが出来ないのだぞ。あの、冠天堂のゆるふわロールケーキを！」

「それなんですけれど……」

電話が鳴ったのはちょうどその時だった。く

そ^二 どうして、このようなときに！ しかも見たことがない電話ということは……。

「……依頼の電話だ」

仕方がない。正直一番電話に出たくないタイミングではあるが、電話に出ないとお金を儲けることができない。そう思って私は電話に出ることとした。

「もしもし、こちら柗木伝承相談所ですが」

『……依頼の電話はこちらで問題ないでしょうか』

声が聞こえた。

か細い男性の声だった。何というか聞いただけで幸が薄そうな感じだったが、それは言わないう約束というものだ。内に秘めておく必要があるからな。

はてさて。

仕事の依頼というのだから、少々まじめに話

を聞いておく必要があるな。そう思って私は電話に耳を傾けていく。

「はい。そうですが」

『ああ、そうですね。ありがとうございます。はい、私は新井と申します。実は、我が家には座敷童がいると昔から言われているのですが……、どうも我が家には幸運が訪れないようなのです』

座敷童。

確かに座敷童には家にいるだけで幸運を招くといわれている、定番の妖怪といえるだろう。

だが、その座敷童が幸運を齎さない？ それははいつたいどういうことだろうか。

新井と名乗った男の話は続く。

『そして、不審に思った私は、座敷童が住まうといわれる部屋に向かったのです。……我が家にある奥の住まい、それがその部分となります。普

段は当然座敷童が住んでいますから、入ることは殆どありません。けれど、行ってみたら……、そこは血のように真っ赤だったんです。写真も撮影してあります。どうか一度詳しい話を聞いていただけないでしょうか」

それを聞いた私は、疑問を浮かべる形となった。座敷童が不幸を呼び寄せた、ということか？

それにその地のように真っ赤な部屋。気になる。かなり伝承、あるいは妖怪の可能性がある。もしかしたら除去する必要もあるし、場合によっては新しい妖怪をパッケージングする必要もあるかもしれない。

「……解りました。それでは一度、お話をお聞きしましょう。場所はいかがなさいますか？ 事務所では話を聞きますが、別の場所でも問題ありませんが」

『そうですか……。実は私の家は江の島にありまして……。できればその近所でお願いたいのですが』

それなら、と私は思っている場所を待ち合わせ場所に指定した。

新井は困惑しているようだったが、少ししてそれを了承した。

そうして、新井と私の通話は終了した。

2

三日後。

冠天堂フルーツパーラー江の島店に私と少年、そして新井は居た。新井は眼鏡をかけて黒いぼさぼさとした髪、それに赤と青のボーダーのポロシャツを着用した、見るからに根暗な大学生

みたいな風貌だった。おっと、これをいうと根暗な大学生に風評被害だと言われてしまうが、それについては面倒なのでこれ以上言わないことにしておこう。まあ、口には出していないから安心したまえ。

「先ずは……話し合いの場を設けていただいてありがとうございます」

おずおずとしたような口調で新井は言った。

「別に問題はない。私はそういう仕事をしているから話を聞いているだけだ。面白いかどうかは、私が判断する」

「面白い……ですか？」

「ああ。正確に言えば、私がやるに値する仕事かどうかを判断する、ということだけだ」

フリーランスだから、こういうところはメリットになるよね。結局のところ、私としては仕事なんてどうだっていい。別に金に困っているわ

けではないのだから。だからこそ、私にだって仕事を選ぶことに關しては自由がある。組織に所属していればある程度組織の意思に従わなくてはならないが、個人であればその必要はない、ということ。つまり仕事を選ぶ方には、私の面白いと思う心が最優先に選択されることとなる。私が面白いと思えばお金なんて二の次。逆につまらないな、と思ったら幾らお金を積まれても無駄、ということだ。やる気が出ないから、仕事にならない。それが結論だ。

「……解りました。取り敢えず、お話だけさせてください。我が家に纏わる、座敷童の話」

そうして新井はゆっくりと話を始めた。それが私にとって面白いか面白くないのか、そして、仕事を引き受けるに値するものであるかどうかは、とにかくこの新井の話を聞いてから判断するしかないだろう。

新井の話聞き終えるまで、ゆるふわロールケーキを食べることにしよう。それにしても、今日は客が多い。きつと冠天堂の閉店が決まってから俄かのファンが増えてきたのだろう。『テレビでやっているし、有名だから、どうせ閉店するのなら一度食べてみようか』という考えに違いない。はつきり言つてそんな考え下らない。それは意味がないことだし、そこで継続して行きつきの店にするのであればまだ問題ないとはいえ、一度きりで終わりにするのであれば、猶更来てもらいたくない。ファンが増えるのは大変嬉しいことではあるのだけれどね。最近どうも、そういう連中が表れて困っている。

はてさて。

ゆるふわロールケーキはほんとうに美味しいものだ。生クリームに果実をふんだんに入れていて、それをスポンジケーキで巻き込んでいる。さらに外側も生クリームで凹凸を作っているため、見るだけでも面白い形になっている。

因みに。ゆるふわロールケーキを食べるには、フォークではなくスプーンを使用する。それはスポンジケーキが柔らかく、かつ生クリームを大量に使っているため、スプーンを使用したほうが食べるうえで効率が良かったのだ。

食べるだけでフルーティーな香りと、生クリームの滑らかな食感、それにスポンジケーキのふんわりとした食感が広がる。まさに『ゆるくてふわふわ』な気持ちになる。それがゆるふわロールケーキだった。和菓子屋一筋ウン十年とやってきた冠天堂が、初めてリリースした和菓子と

洋菓子のコラボレーション。それが、ゆるふわロールケーキだった。

「……あの、話、聞いていますか？」

うん？ まさか私がゆるふわロールケーキを食べていて、話を聞いていないなんてそんなことがあるわけないだろう？ それにその怪訝そうな表情はなんだ。まったくもって不愉快だ。私がおんなのようなことをするわけがないだろう。まったく、私が大学を卒業したのはつい数年前ではあるといえ、こんな僅か数年で大学生の常識はここまで地に落ちたのか？ ……ということとは別にいいか。大学生全体に傷つけるような発言をして、イメーヂを落とすわけにもいかない。これはきつと、彼があまり気づいていないというだけ。ただそれだけなのだろう。そう受け入れるしかない。私はそう思いながら、ゆっくりと頷いた。

「聞いていないとでも思っているんですか。新井さん。あなたの家には座敷童を祭る和室があって、その和室に行くと、血のように真っ赤な和服を着た女性が居た……と。そういうことでしよう？」

聞いていたんですね、とはつきり口にする新井。別にいいけれど、そういうことは気にしたほうがいいぞ。私は別に気にしない人間だから問題ないがな。

そんな新井の人間性に関することはどうだっ
ていい。問題はその『座敷童』について。赤い和服を着た座敷童……か。まあ、話を聞いていた限りだと、一つしか考えつかないのだが。

「……どうですか。一度、調査をお願いできないでしょうか？」

「調査については問題ないでしょう。……ただ、現在の説明を聞いただけでも、あなたの家に何

がいるのかは判明してはいますが」

「わ、解っているのですか」

コーヒーを啜りながら、ゆっくりと頷く。

「赤い座敷童、という言葉をご存知でしょうか」

私はゆっくりと、その言葉を告げた。

まあ、当然ながらそんな単語は専門知識の持っている人間しか知る由もない。だから、いま目の前にいる新井が首を傾げているのは、はつきり言って『想定範囲内』だった。

私は話を続ける。

「座敷童というのは、住み着く家に幸福を与えたと知られています。それが、普遍的な座敷童のイメージになります。……けれど、座敷童には、人々に不幸を与えるという説話も残されている。それが、赤い座敷童。赤い座敷童は、人々に不幸を与える。そして、その座敷童が家に住み着いているとなると……、その家にも不幸を齎す、とい

うことになるわね」

「……どうすれば、どうすればいいのですか！」

新井は身を乗り出す。

目立つからやめてほしいなあ。そんなことを思いながらゆるふわロールケーキの最後の一口を口に入れる。

名残惜しく思いながらも、気持ちを切り替えて、私は言った。

「はつきり言って、追い出すことは専門外だけれど……、でもやるしかないわね。取り敢えず、今から家に向かうことは出来るかしら？」

その言葉に、新井は大きく頷いた。

少年は大学の講義があるとのことなので、向

かうのは私だけになった。まあ、別に問題ないだろう。仕事をするのは主に私なのだから。

新井とともに江ノ電に乗り込み、鎌倉駅で下車。そのまま横須賀線に乗り込んで横須賀駅で下車した。

「……何だ。家は横須賀だったのか。であれば、横須賀で話を聞けばよかったな。申し訳ないことをした」

「いえ。別に問題ありません。それに、横須賀はいいところですがゆっくりとお話をする場所、というものが私の中で見つからなかったものですから。江の島でお話しを聞いていただいて問題ありませんよ」

三笠公園の傍にある大きな一軒家、それが新井の家だった。旧家か何かだろうか。それにしても三笠公園には多くの人間がやってきているな。そういえば最近戦艦がブームになっていると聞

いたことがあるし、それが影響しているのか？少年も戦艦が出るゲームをプレイしている、と言っていたし。まあ、私はそういうゲームはあまり遊ばないから興味は一欠片も無いわけだが。

家に入り、居間に到着する。それにしても、人の気配が一切ない。この広い部屋に、誰も住んでいないのだろうか。

「……母も父も、不幸が立て続けに起きてから引きこもりがちになりました……。ですから、それを何とかしたいのです」

ははあ、家族がそういうことになってしまったのか。ならば仕方がない。そう焦る気持ちも分かる。

少し時間を置いて新井はお茶と豆大福を持ってきた。皮から豆が出てきそうだと言わんばかりのごつごつ具合だが、それがまた手作りというか、美味しそうな雰囲気醸し出している。私

は嫌いじゃないぞ、こういう大福は。

お茶を頂いて、それから大福を一口。うん、粒あんか。やつぱり大福は粒あんに限る。別にこしあんがダメというわけではないが、どちらかといえど粒あんだらう。

大福を食べ終わった段階で、私は一つ頷いた。「さて、それでは、赤い部屋とやらに連れて行っていただきますでしょうか」

「そういえばネットの都市伝説で赤い部屋というのがあったな。確か、『あなたは好きですか?』というポップアップを閉じると、閉じた人間は死ぬんだったか。まあ、それとこれとは明らかに話は違うと思うが……」

「解りました。それでは、ご案内いたしましょう」新井はそう言って立ち上がると、部屋を出て行った。私もそれを見て、新井の後を追うのだった。

新井が到着したのは、新井が説明していた離れだった。離れまでは廊下で繋がっているため、靴を履いて移動する必要は無い。

もしかして元々誰かが住んでいたのではないか? そんなことを思ったが、一先ずそれは一つの可能性として置いておくこととした。

そして、障子の前に到着する。

「……開けるぞ」

「どうぞ」

新井の了承を受け取り、私は障子を一気に開け放った。

そこに広がっていたのは——一面真っ赤に染まった部屋だった。

壁、床、天井は勿論、柵やタンス、テーブルに布団などの家具までもが真っ赤に染まっていた。まるで、それ以外の色が抜け落ちたかのよう

「こいつは……成程ね」

そして、その部屋の中心には——これまた赤い浴衣を纏った女性がすやすやと眠っていた。

「……どうしたのですか。もしかして、何か見えているんですか」

「見えていない、とは言わせないぞ。部屋の中心に居るだろう。赤い浴衣に身を包んだ、私と同じくらいの女が」

「……まさか、それが座敷童、だと？」

「さあな。いずれにせよ、確認する必要があるだろう」

そうして、私は部屋の中に入っていく。

どうなるか解らなかつたが、あっさりと中に入ることが出来た。

そうして私はその座敷童に声をかけた。

「……名前が解らないから、座敷童と呼ぼうか。お前、いったい何がしたい？」

「……、」

すやすやと寝息を立てている。

根気がいるな……。そんなことを思いながら、身体を揺さぶろうとした、ちょうどその時だった。

「そんなことをしなくても、起きているのよ」
目を閉じたまま、座敷童は答えた。

「……起きているなら、さっさと答えてくれな
いか。面倒な話になる」

或いは騙されている姿を見たかっただけか。
だとすれば随分と子供っぽいが。

座敷童の話は続く。

「私は別に座敷童として住んでいるつもりも無ければ、かつては人間だったよ。ただ、それだけを言っておこうか」

唐突に。

座敷童は衝撃の事実を口にした。

それはつまりどういうことだ？ 座敷童は座敷童ではなくて、ただの人間だった……だと？ それは、恐らく、人間が座敷童に、妖怪に変化したということになる。まあ、確かに人間が天狗になるという説話があるくらいだから、人間が座敷童になるケースもあるのかもしれない。

だが、だとすれば。

新井は嘘を吐いている、ということになる。座敷童として住んでいるつもりはない、という言葉から推察するに、長年ここに住んでいるわけではないということになるのだろう。そして、その意味は——どういうことだ？

「それに、彼に私の姿が見えていないと思っているのかもしれないけれど、それは真っ赤な嘘。彼には私の姿が見えているはずだし、声も聞こえているはずだよ。そして、彼は私の存在から逃げている……ということだね。真っ赤な部屋、真

っ赤な浴衣、女性の姿を見ようとしな。……さあ、ここから導かれる結論は？」

まさか。

まさか……ね。

「なあ、一つ質問していいか？」

私は背後に立っている新井に問いかけた。

「……何でしょうか？」

一瞬の間をおいて、新井は答える。

「母親と父親は、どこに居るんだ？ この家にか？」

「そうですね。この家には両親の部屋がありませんので、そこにいます」

「ふうん……。もう一ついいかなあ」

「何でしょうか。私に答えられる範囲ならば」

「……この部屋の色、たぶんきつと、私にも君にも持っているあるものを使って人工的に、正確に言えば二次被害になるのかな。とにかく、人の

手で塗られたものだと思うよ。……さて、それは何だろうね？ 人間の身体に常に巡っている、酸素や二酸化炭素、エネルギーを運んでいる、その流れとは？」

「……すいません、言われている言葉の意味が理解できないのですが」

笑みを浮かべて、新井は言う。

その笑みはどこか冷ややかなイメージが見える。

「……この部屋の色、すべて血だよ。人間の血だ。人間を殺した時に、その血があまりにも激しく出過ぎたのだらうよ。そしてこれは、お前が父親と母親を殺したときにできた血。そして今私の目の前にいる、不幸を届ける座敷童は……お前の母親だった存在だらう」

「何を言っているのですか？」

途端に、口調に怒気が混じる。

まあ、ここまでは想定内の範囲だ。

さあ、突き詰めていこうじゃないか。この結論に、如何に突き詰めていくか。もう道筋は見えている。

「……この事象を行ったすべての元凶、とどのつまり、父親と母親を殺したのはお前じゃないか？」

「何を言っているんですか。あなたは、あなたは、わざわざ私が雇っておいて、私を蔑むような発言を言いに来たんですか！ 帰ってください！ 父はもう十年以上前に亡くなっているのに、ここに父の血があるわけじゃないじゃないですか！」

「……ボロを出したな」

ここで終わり。幕引きだ。案外早かったが、それはまあ、詰めが甘かったということにしておこうか。

「別に私はついこないだ父親を殺したとも言っ

ていないぞ？ それにお前はさつき言っていたよな。父親と母親は家に引きこもっている、と。けれど、お前は今十年以上前に死んだ、と言った。矛盾してはいないか？」

それを聞いて、目を丸くする新井。

どうやらこんなところで失敗するとは思っていなかったのだろうな。

「大方、私に赤い座敷童のことを調べさせて、あわよくば消し去ろうとしたのだろう。だが、残念だったな。そこまで私の眼は節穴ではない」

「……なぜ解った」

あっさりと言げる新井。

「お前の母親が教えてくれたよ。殺した後、その罪に向き合わないと、言っていた。ずっと逃げている、と言っていた。まあ、殺人の罪を犯した人間がその罪と向き合っていれば、とつくに自首するなりなんなりでその罪を償っているだろう

がね」

それを聞いた新井は膝から崩れ落ちた。

もうこれ以上私が出る幕は無いだろう。そう思って、私はそのまま部屋を後にした。

新井はずっと泣いていた。その涙が誰のための涙であるかは——言うまでもないだろう。

5

「……そんなことがあったんですね」

次の日。私は少年からあの出来事の顛末を教えてほしいといわれたので、説明した。そうして終わったあとのコメントがそのコメントだった。「まあ、ハッピーエンドとは言えないが、少なくともバッドでも無いだろう。彼はあのあと自首したそうだよ。母親を殺した罪を償う、とね」

テレビのワイドショーではその話題で持ち切りになっていた。当然だろうな、母親を殺したという事件だ。ワイドショーで盛り上がるにはうってつけの話題かもしれない。被害者からすればたまったものではないが。

少年は私の机に紅茶の入ったティーカップを置く。

「ああ、ありがとう。……そうか、そういうえば、冠天堂は潰れたんだったな……」

やはり、あのゆるふわロールケーキを食べないところか落ち着かない。昨日食べに行つたとはいえ、恐らくもう食べに行くことは出来ないだろう。ミーハーな人間が日を経るごとに増えていくだろうからな。

「夏乃さん、その話なんですけど」

少年がそう言って冷蔵庫を開ける。

なんとそこには冠天堂のロゴが入った箱が入

っていた。冷蔵庫からそれを取り出して、私の机の上に置く。そして箱を開けると、そこに入っていたのはゆるふわロールケーキだった。

「これは……？」

「冠天堂は閉店します。けれど、それは、フルーツパーラーだけなんですよ。菓子の販売自体は店舗と通信販売で続けていくそうなんです、って……この前伝えようとしたんですけれどね。

電話が入ったので途中で切っちゃったんですけれど」

それを早く言え。私がどれだけ冠天堂ロスに苦しんだと思っているのか。少年はきつと解らないだろう。いや、恐らく誰にも解らないかもしれない。そんなことを思いながら、私は今日も冠天堂のゆるふわロールケーキに有り付くことが出来るのだった。

終わり